

【深沢亮子デビュー55周年記念】

深 澤 亮 子

ピアノ演奏会



2009年8月22日(土) 午後1時30分 開演

会場：東金文化会館小ホール

主催：深沢亮子のピアノを聴く友の会 共催：(財) 東金文化・スポーツ振興財団

協賛：ネーブル会・深澤亮子後援会

ごあいさつ

深沢 亮子

お忙しい中、今日は私のデビュー55周年記念演奏会にご来場いただき誠にありがとうございます。私の演奏を愛してくださっている東金と佐倉の方々の意により主催、東金文化会館が共催、ネーブル会が協賛してくださり、又、かつて両親や弟 総生の活動の源でありました「春陽音楽研究会」「桂葉会」の皆様にも、ご尽力をいただきましたことを心より御礼を申し上げます。

5月21日には東京の紀尾井ホールにて自主コンサートとしてデビュー50周年記念リサイタルを行いました。今日こうして私のふるさと東金でも演奏会を開いて下さるというお話をいただきました時は、本当にありがたく嬉しく思いました。

曲目もいろいろ考えまして、亡き両親や弟ゆかりの曲、そして今年はウィーン古典派の巨匠ヨーゼフ・ハイドンの没後200年、更にドイツ・ロマン派の大作作曲家 フェリックス・メンデルスゾーンの生誕200年に当たりますので、2人の作曲家の作品も入れ、あとはポーランドの「ピアノの詩人」フレデリック・ショパンの曲で締めくくるプログラムを組みました。

大野総生のピアノ組曲「人魚姫」は、アンデルセンの有名な童話をもとにして、逝去の前年1972年に作曲されました。春陽音楽研究会の発表会で生徒の皆さんにより演奏されました。この組曲を一生懸命創っておりました弟の姿が眼に浮かびます。全曲ですと時間的に少し長すぎますので数曲を割愛させていただきます。

父は若い頃から良寛様が大好きで、そのお歌や書簡、書などを通じまして、子ども好きで、謙虚、清らかなお人柄を敬慕しておりました。その良寛様をテーマとした曲集を書いていただくという父のたつての願いを千葉大の同僚、名誉教授の作曲家 寺内昭先生が快くお引き受けくださり、「良寛さんと子どもたち」という素晴らしい小品集が出来上がりました。手の小さい子どもさんでも弾けるようにと、度々先生のご自宅へお願いに伺ったようです。1994年のおさらい会で生徒達が全曲を演奏、寺内先生もお喜びくださいました。その上「はるび」に父のことを「東金の良寛様」と書いて下さる等、今は亡き先生の懐かしい思い出となりました。

長年にわたり、私の音楽活動を温かく支え続けて下さいました方々に感謝の意を表し、皆様のご健康、ご多幸をお祈り致します。今後共何とぞよろしくお願い申し上げます。



東京チャペルセンターで初のリサイタル 1954年

◎変奏曲 ヘ短調 HobXVII 6

ヨーゼフ・ハイドン (1732～1809)



本年はハイドン没後200年記念の年にあたり、ハイドンの故郷オーストリアを始め世界各地で記念演奏会等が行われています。本日の演奏会もハイドンの作品で開幕です。ハイドンは「交響曲の父」と呼ばれ、生涯に100曲以上の交響曲を作曲していますが、ピアノ・ソナタも60曲以上作曲しています。神童と言われたモーツァルトの青少年期に、ハイドンは活躍しており、彼はハイドンの音楽から多くのことを学び、生涯にわたりハイドンを尊敬していました。ハイドンもまたモーツァルトを尊敬しており、ロンドンでモーツァルトの死を知った時、「ただ茫然としてしまい…… かけがえのない人物を神がこんなに早くあの世に召されると」と大変悲しんだそうです。ハイドンにとって大きな衝撃であり、お互いに親しかったことを物語っています。変奏曲 ヘ短調は、「アンダンテ 変奏曲」とも呼ばれ、1790年か1793年にウィーンで作曲されたと推測されています。ヘ短調の主題が悲しみの響き、情感を漂わせているところから、モーツァルトの死を悼んだ作品ともいわれています。曲の構成は、短調と長調の2つの主題が交互に変奏を繰り返し、終曲となります。

◎ピアノ組曲「人魚姫」から

大野 総生 (1994～1973)

1 序曲「青い海」

海をはるか沖にでますと、水は矢車草のように青く、ガラスのように透きとおって澄んでいます。

2 海の底

海の底には、世にも珍しい木や草が生えていて、その一番深い所には人魚のお城があります。

3 すえむすめ

お城には、人魚の王様とおばあさま、それに6人の美しいお姫さまが平和に暮らしておりました。中でも末のお姫さまは、誰よりも可愛らしく、ばらの花びらのように、つややかな肌と深い湖のように澄んだつづらな瞳、そのうえ誰もが持つていないようなきれいな声の愛らしいお姫さまでした。

4 おばあさまのお話

お姫さまのお母さまはお亡くなりになり、おばあさまがお城のことをきりまわしていました。姫たちは、おばあさまから海の外の人間の世界の話を聞くのが一番楽しみでした。ある日、おばあさまは「お前たちが15歳になったら、海の上に浮かぶあがることを許してあげましょう。そうしたら、あなたたちが見たがっている人間の世界や陸の動物たち、星のまばたきのような町の明かりを見ることが出来るでしょう」と言いました。

10 十五歳の人魚姫

一番末の姫は、はやく海野外へ出てみたくなりません。ようやく15歳になり、海の外へ出られる日きた時、おばあさまは姫をきれいに化粧し、真珠で作った白ゆりの花輪を頭このせました。末の姫は、胸をときめかして一筋の糸を引くように、まっすぐ海の上へと昇ってゆくのでした。

11 若い王子

海の上はおだやかな美しい夕暮れです。雲がうす紫に照り映えて静かに流れています。ふと気がつくと思本マストの大きな船がイカリを降ろしています。姫は引かれるように、その船のそばに泳いでいくと、今まで聞いたこともないような音楽と歌が聞こえてきました。色とりどりの灯りがともされ、おおぜいの着飾った人々の中に、ひときわ目立って気高く立派な王子さまが見えました。王子さまの誕生日のお祝いの最中だったのです。姫は、いつまでもこの船と王子から目をはなすことが出来ませんでした。

12 朝

ところが突然、嵐がおこり、船は大波に巻き込まれ、ふたたび、その姿を現しませんでした。人間は、水の中では生きられないことに気づいた人魚姫は、夢中で王子を探し助けました。明け方になって、嵐はやみ、また輝かしい太陽が海面に光をさしました。王子は目を閉じたままでしたが、姫は王子の美しい顔に心をこめて、そっとキスをして「王子さまが生きかえりますように」と祈りました。頬が、だんだんバラ色になってきた王子を抱いて、人魚姫は陸へ泳いで行きました。陸の高い山の頂には、白い雲が朝日を受けてキラキラ光っていました。



14 魔女

人魚姫は、どうしても人間になって王子さまのそばへ行きたいと思い、恐ろしい魔女のところを訪ねました。魔女は、人魚姫の顔を見るとすぐに「おまえさんは、王子を手に入れたいばかりに人間になりたいのだろう」と、ぞっとするような声で言いました。そして「私の作る薬を飲めば、その尾は人間の足になって、その歩き方はだれよりも上品でかみいらしいだろうよ。しかし足が地上にふれるたびに、するどい剣で突き刺されたように痛むんだよ。その上、一度人間になったら二度と人魚に戻れないし、また王子がおまえとの結婚を約束しなければ、けっして不死の魂なんかもらえないよ。王子がほかの女と結婚するようになったら、おまえの心臓は破裂して海の泡になってしまうのだよ。」とええ、それでもかまわないわ」と人魚姫は言いました。

15 口のきけない人魚姫

魔女は続けて言いました。「おまえさんのきれいな声は私がもらおうよ。」「でも声をあげてしまったら、私は何が残るでしょう」と人魚姫は顔から血の引く思いで言いました。「美しい姿やものいう目があるじゃないか。さあ、舌

を切らせてもらいますよ」。こうして魔女は人魚姫の舌を切り、そのかわりに人間になる薬を人魚姫にわたしました。姫は、もう声が出なくなり、歌も歌えず、ものも言えなくなってしまいました。

16 さよなら私の海よ 姫は人魚のお城に戻ってきましたが、今では口がきけません。悲しみに張りさけそうな心で、なつかしい家族にそっと別れを告げ、振り返り振り返り海の上へ昇って行きました。人魚姫は、王子のお城の大理石の階段へ来ました。月は静かな海面を青く照らしていました。姫は魔女にもらった薬を一息に飲みました。すると体がまるでキリで刺されるように痛み、あまりの苦しさに気を失ってしまいました。

19 楽しい日々 お城で姫はきれいな洋服を着たり、みんながうっとり見とれるような見事な踊りを踊ったりしました。また、王子と馬に乗って高い山に登ることもありました。お城の生活はとても楽しそうに見えました。しかし、夜がふけて、お城の人々が眠ってしまうと、海に続く階段に降りて、焼けるように痛む足を冷たい海の水で冷やすのでした。そうしたある晩、お姉さまたちが波の上にあらわれ、海の下の人魚のお城で、みんながどんなに悲しがつているかを話してくれました。

20 だれよりもやさしい心 王子は姫を好きになりましたが、お姫にしようとは考えていません。王子が小さな人魚姫を抱きしめて、その小さな額にキスをすると姫の澄んだ目が、こう聞き返しました。「あなたは、この世の誰よりも私を愛おしいと思ひして」すると、王子は「ああ、私はだれよりも君が好きだよ。君はだれよりも美しい心を持っているからね。それに船が壊れた時、僕の命を助けてくれた娘さんに、とてもよく似ているのだよ」と言うのでした。

21 嵐の晩 私か助けてあげたのだけど 「あゝ、王子様は私が命を助けてあげたのにご存知ないのだわ」と姫は心に思い、深いため息をつきました。

22 ものいう目 人魚姫の王子への気持ちにもかかわらず、王子は結婚することになりました。隣の国のお姫さまがお姫になるという噂でした。「父上と母上のお望みで、きれいなお姫さまに会って来なければならぬんだ。でも、どうしても連れて帰って来いとおっしゃるのでないのだよ、私は、その姫とは結婚しないだろう。なぜって私のお姫になるのは、嵐の朝、私の命を助けてくれた娘だけだと思っているのだから。隣の姫が、その人に似ているはずないし。むしろ、私はお前を妃に選ぶよ。おまえは私を助けてくれた人にそっくりなんだから。ねえ、もの言う目を持った可愛いひろいっ子さん」。そう言って、王子は人魚姫のかわいさ、赤い唇にキスをしたので、姫は人間としての幸せと不死の魂が、今にも自分のものになるような気がしました。

23 となりの国のお姫さま 王子は船で隣の国を訪れました。教会の鐘がなり、正装した多くの騎士が港にならび、華やかに歓迎されました。毎晩、パーティーや舞踏会が開かれました。お姫としての教育を受けた姫が帰って来ました。王子は、その姫に会った時、愛らしく、美しく素敵な人だと思いました。「あゝ、あなたですか！ 私の命を助けてくれたのは！」と王子は叫んで、そのお姫さまを強く抱きしめました。

25 するどいナイフ その時、お姉さまたちが波の上に浮かんでくるのが見えました。美しい長い髪はブツツリと切り落とされています。「私たちの髪の毛を魔女にやってしまったのよ。おまえが今日死ななくてよいようにするために、このナイフでおまえが王子の心臓を突き刺せば、おまえは人魚に戻るのです。さあ、思い切って王子を殺して帰っておいで」。

人魚姫は王子の部屋へ入って行きました。王子と王女は幸せそうに安らかに寝ていました。人魚姫は王子の額にキスをしました。すると王子は王女の名前を呼ぶのでした。王子の心のあるのは王女一人だったのです。人魚姫の握りしめていた冷たく光る鋭いナイフが、ぶるぶる震えました。次の瞬間、姫はナイフを海へ投げ捨てました。ナイフはまるで銀の花びらのように波間をぬって落ちて行きました。

26 海のあわ 人魚姫はすでにかすんできた目を、もう一度、王子の上に投げかけ、身を躍らせて海の中へ飛び込みました。とたんに自分の体が泡になってゆくを感じました。

27 朝日 太陽が海から昇って、穏やかな温かい朝の光が冷たい海の泡を照らしました。人魚姫は少しも死んだ気がしません。自分の体が軽くなって泡から抜け出して、ずんずん上へ昇って行くのに気がつきました。

「私はどこへ行くのでしょうか」。こう人魚姫はつぶやきました。

28 空の精 人魚の娘には不死の魂というものはありません。人間の愛を得なくては、それを持つことは出来ないのです。かわいそうな人魚のお姫さん。あなたも私たちと同じように一生懸命に努力なさったのね。そして苦しみながら空の精の世界へ昇っていったのですね。あたりに不思議な美しさを持つ人たちの声が漂ってきました。

人魚姫は両手を太陽のほうへ高くさくあげました。その時、はじめて涙というものを感じました。

29 終曲「バラ色の雲」 船の上は騒がしくなってきました。王子が王女と一緒に人魚姫をさがしているのが見えます。二人は人魚姫が海の

上に身を投げたことを知ってでもいるかのように、ざわめいている海の泡を悲しそうに見つめていました。

人魚姫は人々に見えないように、王女の額にキスをし、王子に微笑みかけると、ほかの空の精たちと一緒に静かに空を流れているバラ色の雲のほうへと昇っていったのです。

米 ピアノ組曲「人魚姫」は朗読付きでの演奏も考慮されており、上記の朗読原稿は大野総生氏の作です。

深沢亮子先生の弟 大野総生氏は、幼少の頃からヴァイオリンを学んでいました。しかし音楽大学へは進まず、東京大学工学部で燃料工学を専攻、同大学院修了後、健康上の理由から東金に帰り、父 大野桂氏の主宰する春陽音楽研究会でヴァイオリンの指導に携わり、音楽研究会の発展に尽力しました。プロ演奏家として道は歩まなかったが、彼の音楽性、演奏技術は卓越したものであり、曲への深い解釈、分析および温かな音色は、天性の才でありました。1970年頃から、総生氏は音楽作品の創作を考えており、折しも放映されていた手塚治虫のアニメ「人魚姫」(アンデルセンの童話)に感銘し、「人魚姫」を題材にピアノ組曲の作曲に取り組みました。29曲にもおよぶ組曲は1972年早々に完成。メロディーは愛らしく美しいものです。童話は悲しい物語と言えますが、総生氏は人魚姫の優しさを大切に作曲しています。1972年7月、第23回春陽音楽研究会で子どもたちにより初演されています。総生氏は、その後も作曲を続ける意欲をもっていました。残念なことに1973年2月に天国に旅立ってしまいました。

深沢先生は、故郷東金におけるデビュー55周年記念演奏会で、想い思いを込めて、「人魚姫」をプログラムされた。演奏時間の関係から抜粋となるが、総生氏の作曲意図と物語がわかるように配慮されています。この「人魚姫」は、深沢亮子先生、小田美津子さん、それに作曲時に相談のつた私 馬場孝之が演奏していますが、今後とも多くの人々に演奏していただけることを願っています。なお、ピアノ組曲「人魚姫」は、著名な作曲家 助川敏弥氏が監修、優れた作品と評価しています。

◎17の厳格な変奏曲 二短調 Op. 54 メンデルスゾーン(1809～1847)

メンデルスゾーンのピアノ作品で有名なのは彼が生涯にわたり書き続けた「無言歌集」ですが、彼の生誕200年を記念して本日演奏される曲は「17の厳格な変奏曲」です。この曲は1841年、メンデルスゾーン32歳の時に作曲、熟慮された秀作です。彼は他の作品で用いたことのない手法を採り入れ、変化に富み、短調にもかかわらず明るいものであり、伝統的な古典の形式を重んじながらも音楽の内容の変化を求めています。ピアノ変奏曲の歴史面からは、バッハやベートーヴェンの変奏曲の伝統を継ぎ、ブラームスの変奏曲への繋ぎをしている作品として意味のある重要な位置づけの作品といえます。「厳格な」という題名も古典の伝統的形式を意識してつけられています。曲は、主題と17の変奏曲から構成されており、主題は4声の荘重な感じに満ち、各変奏は装飾的に表れ、スタッカートによる軽いリズム、シンコペーションの躍動的な動き、和声の飛躍と多彩です。17番目の変奏は終曲にふさわしくダイナミックで、全曲を華麗にまとめています。



◎ピアノ小曲集「良寛さんと子どもたち」から 寺内 昭(1927～2003) 朗読原稿 寺内昭

- ・良寛さん 「良寛さん 良寛さん 手まりをつこう おはじきしましょ かくれんぼしよう」
- ・冬ごもり 良寛さんは子どもたちのことを思うと、この退屈な冬の日が過ぎて、早春の来るのを待ちこがれているのです。
- ・おはじきしましょ その1
- ・月 見 美しい名月の夜には、一心に空をあおぎ、月を眺めて感心していました。
「月よみの光をまちてかへりませ 山路は 栗のいかに多き」良寛さんの優しい心遣いがかえります。
- ・柿の実 子どもたちが柿で取ろうとしていた柿の実を、取ってあげると言って木に登り、子どもたちを忘れて、一人で食べ始めました。
- ・里の雪 島崎村に移り住んだ翌年、良寛さんの徳風を慕って貞心尼さんが訪ねて来ました。それ以来、親しく往来するようになりました。ある時、良寛さんの病氣を知った貞心さんが見舞いに来た時の歌に「いついつと待ちにし人は来たりけり、今はあひ見て何か思わん」と待ちわびた人に逢えた喜びの歌があります。また、お弟子さんには「むさしののくさばのつゆのながらへて ながらへは身にしあらねば」と無常のことわりを歌っています。島崎村5年目の暮れの大雪の日、良寛さんの容態の悪いことを知った弟が訪ねて来ました。明るく年の1831年1月6日、良寛さんは、弟、貞心さん、お弟子さんに見守られながら、眠るがごとく静かに息を引き取りました。年は74歳でした。

深沢亮子先生の父 大野桂先生は「良寛さん」の人間性に共感されていたそうです。先生は、子ども好きの「良寛さん」を題材とした子どものためのピアノ小品を、千葉大学名誉教授・作曲家の寺内昭氏に委嘱。19曲からなる朗読付きのピアノ小品「良寛さんと子どもたち」が1992年に出来上がりました。この作品は、1994年第40回春陽音楽研究会で子どもたちにより初演。なお春陽音楽研究会の「春陽はるび」は、良寛の和歌「かすみたつながきはるびをこどもらと てまりつきつきょうもくらしつ」から大野桂先生が採り名付けています。



◎2つのマズルカ 変ロ長調 Op. 7-1 イ短調 Op. 17-4 ショパン(1810~1849)

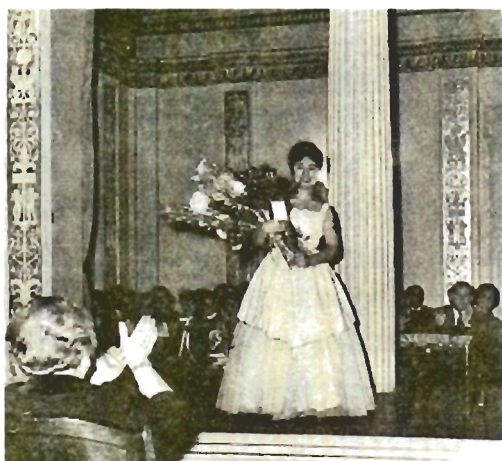
マズルカやポロネーズは、ショパンの故郷ポーランドの農民に伝わる民族舞曲。ショパンはこの舞曲を芸術作品へと昇華させました。熱烈な愛国者であった彼は、祖国を思いおこして、あたかも日記のようにマズルカを書き続け、その数58曲にもおよんでいます。彼のマズルカは、当時独立を目指していたポーランドの人々に大きな勇気を与えたそうです。変ロ長調 Op. 7-1 は、1830年頃作曲された「5つのマズルカ」の第1曲目で、彼のマズルカの中でも特に有名な一曲にあげてよいでしょう。明快なメロディーと躍動的なリズムに満ちています。

イ短調 Op. 17-4 は、1834年に出版された「4つのマズルカ」の4曲目。憂いのある瞑想的なメロディーで、何か不思議な響きを持つ印象に残る名作といえます。彼のマズルカ作品中で特に長い作品の一つです。

◎華麗なるワルツ 変イ長調 Op. 34-1 ショパン(1810~1849)

ショパンはポーランドからパリに向かう途中、ウィーンに長く滞在しました。彼はウィーンの街から聞こえてくるウィーンナー・ワルツにうんざりしたそうですが、ウィーンワルツへのアンチテーゼか、彼は独自のワルツ作品を手がけ、永久不滅の芸術作品としてのワルツとなって、多くの人々に愛され続けています。1831年の作曲。初版の楽譜では「華麗なる大ワルツ」となっており、題名のとおり大変華やかな曲想で、演奏効果も高いショパンの代表的な作品です。

想 い 出 の ひ と こ ま



ウィーン楽友協会ブラームスザールで
ウィーン・デビューリサイタル 1960年



ウィーンから帰国後のリサイタル
の時のスナップ 1962年頃



総生さんの伴奏を 1954年



懐かしい東金の家で
両親と弟たち 1965年

今後の主な演奏活動

9月23日(水) 13:00	佐倉市民音楽ホール
日曜音楽家の集い Vol. V ゲスト出演 主催：西村音楽アカデミー	
問い合わせ：西村音楽アカデミー Tel. 043-463-7885	
10月9日(金) 19:00	カワイ表参道 コンサートサロン パウゼ
深沢亮子ピアノ リサイタル Vol.5 ー変奏曲のタペー	
問い合わせ：カワイ音楽振興会 Tel. 03-5485-8511	
10月27日(火) 18:00	久米美術館
読売日本交響楽団のメンバーと	
モーツァルト：ピアノと管楽器のための五重奏曲 他	
問い合わせ：日壊協会 Tel. 03-3468-1244	
11月9日(日) 19:00	浜離宮朝日ホール
深沢亮子デビュー55周年記念	
ブリュッセル弦楽四重奏団と共に ドヴォルザーク：ピアノ五重奏曲 他	
問い合わせ：新演奏家協会 Tel. 03-3561-5012	
11月29日(日) 15:00	藤沢リラホール
ソロと室内楽の午後 ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲 他	
共演：恵藤久美子 (ヴァイオリン) ・安田謙一郎 (チェロ)	
問い合わせ：藤沢リラホール Tel. 0466-22-2721	
12月12日(土) 14:30	津田ホール
「緑の風」を応援するチャリティーコンサート	
ハイドンとメンデルスゾーンの世界	
問い合わせ：緑の風後援会 麦の会 Tel. 03-3556-3056	
12月18日(金) 19:00	音楽の友ホール
ピアノとヴァイオリンとチェロのタペ	
モーツァルト：ピアノ三重奏曲「ディヴェルティメント」K.254 他	
共演：恵藤久美子 (ヴァイオリン) ・安田謙一郎 (チェロ)	
問い合わせ：日本音楽舞踏会議 Tel. 03-3369-7496	
2010年3月19日(金) 19:00	カワイ表参道 コンサートサロン パウゼ
深沢亮子ピアノ リサイタル Vol.6	
問い合わせ：カワイ音楽振興会 Tel. 03-5485-8511	

深沢亮子先生のデビュー55周年の年にあたり、先生のふるさと東金市において演奏会をと思い、先生にご相談したところ快諾を得ました。そこで深沢先生のピアノ演奏を愛する仲間（東金市・佐倉市）により本日の演奏会を主催することと致しました。全面協力をしていただいた東金文化会館、また協賛をして下さいましたネーブル会に心より感謝申し上げます。さらに本演奏会にご協力いただきました多くの皆様にも御礼申し上げます。

本日の演奏会は、深沢先生におかれましても格別の思いをお持ちのようで、特別なプログラムとなっております。サロンのようなコンサートではありますが、先生の55年の演奏活動の中でも特記されるものとなることでしょう。ご来場の皆様、国際舞台で活躍するわが国の誇るピアニスト深沢亮子先生の益々のご活躍を祈念いたしましょう。

深沢亮子のピアノを聴く友の会 代表 馬場孝之